



幼稚園誕生の時代

—— 関信三の葛藤 ——

国吉 栄

(八) 『幼稚園記』 —— 幼稚園との出会い

関信三の著作について

幼稚園に出会った関信三は、精力的に、あるいは生き急ぐように、次々と幼稚園書の翻訳・執筆に取り組んだ。明治九年七月、幼稚園に関する関信三のはじめの翻訳書『幼稚園記』全三巻が出版された。続いて

十年には『幼稚園記附録』、十一年には『幼稚園創立法』、十二年には『幼稚園法二十遊嬉』と、年ごとにその成果が発表されたが、最後の書が出版された年の十一月四日、関信三は三十七歳で病没した。

ふり返ってみれば、関信三の一連の著作は、日本の幼稚園がしだいに形を整えていった歩みと軌を一にし

ていた。というより、彼が発表した翻訳・著作は、常に幼稚園の歩みの一歩先にあつて、あたかも、暗中模索の幼稚園の事業に、手作りの羅針盤をこしらえているようなものであつた。

日本で最初に出版された幼稚園書としては桑田親五訳『幼稚園』おまごのそのが知られているが、九年一月に出版されたのは全三巻のうち上巻のみ。その後も翻訳は進捗せず、中巻の出版は十年十一月、下巻の刊行はさらに遅れて十一年六月のことであつたから、『幼稚園記』は實質的に最初期の唯一の幼稚園文献であつた。加えて、著者が九年十一月に開設された日本初の国立幼稚園の園長に任命されるに及んで、彼の一連の著作は幼稚園の第一人者の書として、今日考えられている以上になつたのである。

今日彼の書はほとんど忘れられているが、しかしそれらは、歴史を証言するものとして、再読される価値

がある。海外文献が直接日本の幼稚園のテキストになつたのではなく、関信三というひとりの人間によつて消化されたものがテキストとなつて、日本に幼稚園が広まつていった。日本の幼稚園は、彼が呻吟しつつ選んだ一つひとつの言葉によつて形造られていったと言つてもよい。その意味で、翻訳者関信三の生涯をこれまでたどつてきたことは意味があろうし、また逆に彼の著作を通して、晩年というにはあまりにも若く短かつた、彼の生涯最後の数年について考えることもできるのではないかと思う。彼の著作は、保育史研究にとつても、関信三研究にとつても、またとない資料である。

今回から四回にわたつて彼の著作を発表順に取りあげるつもりであるが、紙幅の都合でそれぞれのごく一部にふれることしかできない。彼の著作はすべて国立国会図書館に所蔵されているが、『明治保育文献集』（日本らいぶらり 昭和52）に復刻されており、便利

である。興味のある方は一読されたい。

『幼稚園記』の原典

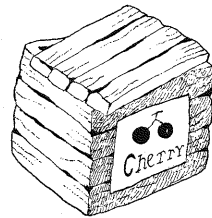
『幼稚園記』の原典は、よく知られているように Adolf Douai の “The Kindergarten” (E. Steiger, 1871) である。著者のドゥアイは、ドイツからの政治亡命者のひとりで、ニュージャージー州ニューアークのジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーの校長を務めていた。一八六一年に同校に付設された幼稚園が、アメリカのジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーに併設された最初の幼稚園とされている。“The Kindergarten” は、十年にわたる幼稚園運営の経験をもつ著者が、師範学校の生徒に向けて行った講演をまとめたものである。

同書は、関信三がはじめて読んだ幼稚園についての書物であった。このことが関信三の幼稚園理解と日本の幼稚園の出発の姿に少なからぬ影響を及ぼしたと思

う。幼稚園とは一体何なのか。自分でもまだよく理解できないものに、彼は何とか言葉をあてがい、形を与えようとした。皮肉なことに、関信三がのちのちまで師とあおいだドゥアイは、

ドゥアイ自身が述べているように、フレーベルの思想を伝えるのに熱心ではなかった。彼はむしろ当時ジャーマン・イングリッッシュ・アカデミーの主流であったペスタロッチの事物教授法の立場から、フレーベルとは距離を隔して幼稚園を紹介しようとしていたのである。しかし、関信三はそのような原著者の姿勢を理解することはできなかった。今日の私たちと違って、比較対照すべき情報を持っていなかったからである。

関信三は、終生、同書をフレーベルの幼稚園のバイ



ブルと考えていた。彼の幼稚園理解がいかに熟成されていったか、そのことにドゥアイの“The Kindergarten”がいかに深く関わっていたかについては、今後彼の著作を読みすすめていくなかでふれることにしたい。

幼稚園の規模

『幼稚園記』から、本稿ではふたつのことがらを考えてみたいと思う。ひとつは幼稚園の規模についてである。多少煩雑になるが、“The Kindergarten”の冒頭の数行を取りあげたい。

“This littel book is intended to help teachers to direct Kindergartens on a larger scale. It is proposed that hereafter all our Primary Schools shall begin with a course of Kindergartening, and that classes of from fifty to a hundred small children shall be gathered into one Kindergarten. Froebel's excellent system has, thus

far, not been tried on so large a scale, and whenever it shall be, it will be necessary, that the class should be temporarily subdivided for different exercises.”（下線筆者）

へ拙訳「小著は、（従来より）大きな規模で幼稚園を運営しようとする教師たちに役立つように書かれたものである。今後、初等学校はすべて幼稚園教育から始められ、幼稚園の園児数は一クラス五十人から百人になるであろう。フレーベルの優れた方法は今までそのような大きな規模で試みられたことはなかったので、それがいつになるにせよ、そうなればどうしても、課題別に一時的にクラスを分割せざるを得なくなるだろう。」

冒頭のこの数行を理解するためには、当時のアメリカの幼稚園の状況を概観することが必要であろう。

一八五五年、アメリカ最初の幼稚園が、ドイツ人亡

命者カール・シユルツの妻マーガレットによつて、
ウイスコンシン州ウオータータウンに開かれた。故国
ドイツにおいてフレイベルの教えを受けていたマーガ
レットが、自分の子どもの教育のために始めたもので
ある。彼らより先に入植していたカール・シユルツの
兄弟や親族の子どもたち、それに近隣の友人の子ども
も加えて、十数人の子どもたちが集まった。その後や
はりドイツ人の子弟のために幼稚園が開かれるが、そ
れも同様の規模であつた。幼稚園創始の地ドイツで
も、イギリスでも、幼稚園はいずれも小さな規模で始
められていた。

ドウアイの書は、そうした中でも比較的園児数が多
い幼稚園を運営してきた著者の経験をもとに、将来公
教育が幼稚園教育から開始され、幼稚園の規模が大き
くなった時に役立つようにと準備された、幼稚園新時
代の実践書ともいふべき書物であつた。それが他の文
献とは決定的に違ふ原典の特色であり、著者の一貫し

た立場であつた。

この箇所を関信三は次のように訳している。

〈関信三訳〉「此小冊子ハ廣ク幼稚園ヲ指揮スルニ於
テ教師ニ裨益アルノ書ニシテ爾後吾輩ノ初歩学校ハ必
ス幼稚園ノ法制ヲ以テ起業シ而シテ五十乃至百員ノ幼
稚ヲ一園中ニ集容スヘキコトヲ陳説セリフレイベル氏ノ
所謂ル法制ノ卓越ナルモ未ダ此ノ如キ高度ニ達セス大
凡ソ各幼稚園ニ在リテハ生徒ノ等級ヲ暫ク區別シ以テ
其課ヲ分附スルヲ一大緊要ナリトス」(傍線筆者)

原典において、著者は「large」[larger] (波線部)

と、大きさを表す語を二度用いている。一行目の
「larger」は従来より規模が大きいという意味で用い
られているが、関が「廣ク」と訳していることに注目
したい。これを規模の大きさについての表現とみるこ
ともできないではないが、後半にある「large」も
「高度ニ」と訳しているから、彼は「large」といふ

語を、量ではなく質を表わす語としてとらえたことがわかる。その結果、「フレールベルの優れた方法は今までどのように大きな規模で試みられたことはなかった」という意味の二本下線の文章を、「フレール氏ノ所謂ル法制ノ卓越ナルモ未だ此ノ如キ高度ニ達セス」と誤訳してしまった。関信三は、原著者がことのほか幼稚園の規模にこだわりを見せていることを、ほとんど意識することができなかった。

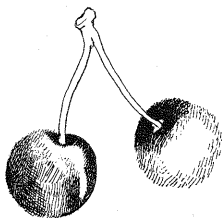
規模についての記述の緊張関係を認識することができなかつたために、彼は結果的に、フレールベルの幼稚園が本来小規模で行われてきていることを行間から読み落としてしまった。そのため、「一クラス五十人から一〇〇人の幼稚園」という表現を、今後の見通しとしてではなく、現実の数字として受け止めてしまった感がある。こうして原典の冒頭のパラグラフは、その全体が無意識のうちに変形されたのである。

興味深いことに、明治八年十一月に東京女子師範学

校の摂理となった中村正直も、「トウアイ氏幼稚園論の概旨」（文部省『教育雑誌』四号）と題する文章の冒頭に、この部分を次のように訳している。すなわち、「二個の幼稚園に五拾人、乃至一百人を入れるべし」。

明治九年六月、いよいよ園舎の工事が始まった。十一月に竣工なつた幼稚園は、同月の仮開業時には園児数七十五、学年末にはその数一五八（『文部省年報』明治十年）を数えた。

日本の幼稚園がかくも大きな規模で出発したことに ついては、さまざまな見方がある。幼稚園はアメリカ經由で伝えられたと言われているが、他にモデルがあるのではないか。あるいは建国の意志の表われとして、また、国威発揚のため大きなものを造つたのではないか、とも言



われている。後者については園舎が非常に立派であったという点から、それを完全に否定することはできない。しかし規模に関しては別の問題であろう。

日本の幼稚園の規模が大きかった理由の鍵は、この個所の訳にあるのではないか。少なくとも今はつきり言えることは、関信三・中村正直ともに、ドゥアイの翻訳を通して、幼稚園とは本来そういう大きさのものであると認識した、という事実である。特に中村正直、きつぱりとした訳は印象的である。おそらく彼らは当時幼稚園に直接関わっていた人々の中で、最も幼稚園に関する知識を持っていた人物であろう。「一箇の幼稚園に五拾人、乃至一百人を入れるべし」という認識が、新時代の全く新しい教育施設を、という自負とあいまって、かくも大きな規模の幼稚園を構想させるに至ったのは必然と言えよう。ここに、アメリカ経由で入りながら独自の姿をとった、日本の幼稚園の原点のひとつがあると私は思う。

音楽

『幼稚園記』でもうひとつ取りあげたいのは、音楽に関する記述である。もつと正確に言えば、音楽に関する記述のなさについてである。

“The Kindergarten”はたくさんの歌を収録していた。もちろん楽譜つきで。なぜなら同書はひろく幼稚園で活用されることを目的として書かれた実用書で、すぐに使えるような楽譜つきの歌は同書のセールスポイントであった。けれども関信三は、歌詞だけを翻訳し、楽譜は紹介しなかった。

彼がカットしたのは楽譜だけではない。ドゥアイは保母の資質のひとつに音楽の素養をあげているが、彼はその一文だけを完全に抜いて訳した。彼が抜いた原文は次の通りである。

A tolerble voice, pure and strong, and some musical training(so as to accompany with the piano)are also

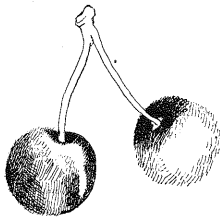
ちなみに中村正直は前述の「トウアイ氏幼稚園論の概旨」の中で、この一行もそのまま訳している。曰く、「この婦人は声の清て且つ大にして又音楽を解するものなるべし、ピアノも大会衆の時には入用たるべし」。もちろん、創設された幼稚園には高価なピアノが備えられた。

では、関信三はなぜ音楽を紹介しなかったのだろうか。当時、一般には洋楽にふれる機会はほとんどなく、仮に洋楽譜を見ても、一体それが何を意味しているのか見当もつかない、という状況にあった。だから『幼稚園記』に音楽が紹介されなかったのも、やむを得ないことかもしれない。幼稚園が開園され、ようやく唱歌が作られても、保姆も園児も雅楽の調べに合わせずむずかしい歌詞の歌を歌い、遊戯をしなければならず苦労だった。小学校の教科でも「唱歌」とは名ばかりで、実際の導入には十年待たなければならなかつ

たことを思えば、残念ながら、洋楽にふれたことのない当時としてはやむを得ない処置であった。と、そのように一般に考えられている。しかし本当にそうだろうか。

『幼稚園記』の翻訳者は関信三である。関信三は自身の体験から洋音楽を知っていた。関信三ほど直接洋楽にふれた経験のある者は、当時の日本にはまれだったのではないかと私は思う。

キリスト教の中でも特にプロテスタントは、「歌う宗教」と揶揄されるほど、歌、すなわち賛美歌を多く用いる。関信三が安藤劉太郎として横浜の宣教師たちのもとに出入りしていた頃、彼自身も英語賛美歌を歌っていた。子どもたちも賛美歌を歌っていた。日本人が洋楽曲を歌うのは至難の技と考えられていたが、実際には、大人



も歌い、子どもたちはなおのこと、わずかの間にやすやすと歌いこなしたのである。関信三は日本人が洋音楽を歌い、かつ演奏までできることを知っていた。さらにその後、彼は西欧に旅立ち、英国に暮らした。彼は英国において、禁教下でのあたりをはばかり賛美ではなく、朗々たる教会音楽と親しく接したのである。ドゥアイの書に掲載された楽曲は、賛美歌や一般の洋楽曲と同じ表記の仕方である。『幼稚園記』に音楽に関わることを一切載せなかつたのは、彼が洋楽譜、洋音楽を知らなかつたからではない。

『幼稚園記』における音楽の扱いを理解するためには、どうしても彼とキリスト教との関わりについて考へざるを得ないだろう。関信三の体験から考えると、彼にとつての音楽の総体は、教会音楽であり、賛美歌だつたからである。

彼が滞在した英国は宗派としては聖公会、すなわち英国国教会で、英国女王は英国国家元首であると同時

に英国国教会の長でもある。彼のような背景を持つものにとつて、英国はことさらに興味深い対象であつたことだろう。そびえ立つ教会の尖塔と、故国とは比較にならない繁栄。幕末・明治初年、海外に学んだものは多いが、彼のように滞在国の宗教そのものに意図的に近づき、そこから故国の将来に思いを馳せたものは極めてまれであらう。

当時彼は強大なキリスト教国を受け入れ、それに学ばなければならぬ現実を認めていた。彼はキリスト教国と呼ばれる社会のあり方を冷静に観察し、すでにキリスト教を邪教とする考えから脱却していたと思われる。彼はキリスト教について深く知ろうと努めた。しかし、聖書を研究しキリスト教を知ろうとするときには理性が働くが、賛美歌を歌うことは感情の表現に属するのである。

『幼稚園記』における音楽の扱いは、彼の諜者としての体験が、彼自身が認識していたであろう以上に彼に

痛手を残していたことをうかがわせる。居留地での体験のうち彼を最も痛めつけたのは、洗礼を受けたという事実よりも、むしろ彼の日常の生活だったのではないか。偽って信仰生活を営み続けることの過酷さ。自分が否定しているものを肯定していると見せ続ける生活。自分自身が抱いている感情を偽り続けることは、

自分を偽ったり、事実の如何を偽ったりするより耐え難いのではないか。感情を抑制して表現する傾向が強い当時であって、偽りの感情をあらわにしなければならなかった苦しみと抑圧の大きさ。憎悪に近い感情を抱いていたものを人前でたたえる嫌悪感。大人が人前で声をあげて歌うなどという恥ずべき行為を、邪教徒と肩を並べて繰り返す屈辱。いたいけな少女たちが異教の歌を歌わせられている「国辱的」光景。彼はこうした毎日を、ただ感情を押し殺すことよって耐え続けていたと思う。彼を支えたのは使命感であった。彼は宗門を守るために、また正義のために戦っていると

信じることによって、このような生活に耐え続けた。にもかかわらず、彼はやがて、すべてが水泡に帰したことを知る……。『幼稚園記』での音楽に対する扱いは、関信三自身の意識的な努力では抑えられない、彼の特異な個人的体験の中で培われた感情に強く影響されたものであると私は思う。

関信三は、唱歌の素材を、洋音楽ではなく、全く別のところに求めた。それが雅楽であった。明治十一年六月に刊行された『幼稚園』おとこのその下巻には、「音楽體操の事」として「手引草の歌」が紹介されているが、『幼稚園記』にならって歌詞のみ訳出され、楽譜は収録されなかった。関信三が『幼稚園記』で楽譜を紹介していたら、幼稚園の唱歌は全く違ったものになっていたことだろう。

今回は、関信三が自らの意思で翻訳に乗り出した『幼稚園記附録』について書いてみたい。